

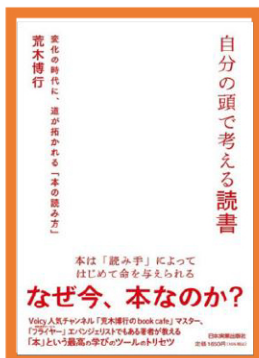
読書術

読書の秋！読書のための本を
紹介します

『自分の頭で考える読書』—変化の時代に、道が拓かれる「本の読み方」—

荒木 博行／著 日本実業出版社
請求記号：019.1

著者は、本は詩に代表されるように、思考するためのメディアだと述べています。だが、私たちは思考することなく内容をなぞっていくだけの「本に読まれる読書」をしていないだろうか。本に読まれるのではなく、自分の頭で考える読書をするにはどうしたらよいのか。本との付き合い方について、新しい視点が得られるかもしれません。



『人生をちょっと楽にする本の話 読書にまつわるもろもろの話』

児童文学評論家が、本や読書をめぐる考えていることを綴った一冊です。小説以外でも、どんな本でも、本を読むことは“読書”なのだということ。「この本、面白いよ。」と言われるのは、「このミステリーの犯人は〇〇だよ。」と言われるくらい酷いことだということ。そんな内容から筆者の本との向き合い方が伝わってきます。易しい話し言葉で児童書やライトノベル、漫画や電子書籍についても書かれています。本を好きじゃない人、本に関して傷ついたことのある人にもおすすめの本です。



赤木かん子／著
ハモニカブックス
請求記号：019.04

『「すぐやる人」の読書術』



塚本 亮／著 明日香出版
請求記号：019.1

タイトルの「すぐやる人」とは、すぐに行動に移す人のことを指し、柔軟な吸収力を持ち、常にインプットとアウトプットを意識している人のことです。質を重視しつつ、新しい情報を吸収し行動に移し、活用していくための方法がよくわかります。また、「すぐやる人」の習慣や考え方も学ぶことができるので、「すぐやらない人」を脱却したいけれど、なかなかできない方はぜひ一度お手に取っていただきたい一冊です。

『読書原論』

鷺田 小彌太／著 言視舎
請求記号：019.1

本著は、著者の長年の読書経験に基づいて記されています。仕事や40代からの読書、人生との関わりなど読書をめぐる話題は多岐に渡っています。読書の効能や環境の整備、デジタルへの向き合いかたといったテーマを考察しています。「読書」とは何かを改めて考えさせる一冊です。

